様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 25 日現在

機関番号：34416
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009～2011
課題番号：21500573
研究課題名（和文）
「一人称の科学」の基盤作り：理論と実践の循環と体験の言語化を促す
質的研究法の開発
研究課題名（英文）
Establishing the foundation for "First Person Science": Development of qualitative research method to prompt the reciprocity of theory and practice and the creation of language from the experiences.
研究代表者
村川　治彦　（MURAKAWA　HARUHIKO）
関西大学・人間健康学部・准教授
研究者番号： 20527105

研究成果の概要（和文）：
本研究においては、西洋近代科学の基本的な枠組みである主客二元論、心身二元論を乗り越える様々な試みの根本問題が身体経験と言語の関係にあるという前提のもとに、身体経験を意味のある形で言語化し理論と実践を結びつけることを可能にする質的研究法の開発を目指した。まず主体経験の共有化の規範を整理し、具体的インタビュー法と合わせて、「一人称の科学」の方法論として提示し、その枠組みを様々な学問領域の課題と接合していくことを中心に研究活動を行った。

研究成果の概要（英文）：
In this research, we started from the premise that the fundamental issue of the various efforts to overcome the problems of western modern science lay in the dissociation between embodied experiences and the language. With this view, we aimed at developing a qualitative research method which would allow us to create the language from the embodied experiences in a meaningful way, and to connect the theory and practice. For this purpose, we first proposed some norms and an interview method to share the subjective experiences as "First Person Science" and then tried to apply this method to various fields of research.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：　総合領域
科研費の分科・細目：　健康スポーツ科学・身体教育学
キーワード：質的研究法、認知意味論、身体性、言語と体験、一人称の科学、

１．研究開始当初の背景

19 世紀後半から科学主義の行き詰まりが明らかになるとともに、西洋近代科学の基本的な枠組みである主客二元論、心身二元論への懐疑が生まれ、現象学や解釈学などに基づく人間科学あるいは質的研究法などの新たな知の伝達の方法論の開発が試みられてきた。

そうした流れのひとつが 1990 年代後半から急速な発展を見せている認知科学の分野における「一人称」アプローチへの注目である。神経科学の F. Varela らが中心になったこの流れの中から、哲学・臨床心理学のジェンドリンと身体教育学のドン・ジョンソンによる「一人称の科学」の呼びかけが行われた。また、認知意味論のジョージ・レイコフとマーク・ジョンソンらによる身体経験と言語の結びつきの探求もこうした学際的な一人称のアプローチへの注目に大きな寄与をなしてきた。

「一人称の科学」として提案されているこれらの研究アプローチは、その枠組みを整理するとともに、身体経験を意味のある形で言語化し理論と実践を結びつけることを可能にする具体的研究法として提供される必要がある。特に、心理学や看護学、健康科学など応用人間科学の諸分野でこうした研究方法の必要性が高まっている。

２．研究の目的

この研究では、こうした背景を踏まえ、従来の客観主義的・表象主義的言語観への反省を出発点とするレイコフとジョンソンらの認知意味論とフェルトセンスに根ざす言語創出の方法を提供するジェンドリンのプロセスモデルとフォーカシングに基づいた研究方法を「一人称の科学」として提案していく。

具体的には、レイコフとジョンソンが示した意味理解におけるメタファーの役割に依拠しながら、主体経験の共有化の規範を整理し、身体経験を言語化し記述する新たなインタビュー方法を提示していくことを目指した。

また、この「一人称の科学」のアプローチを、言語によって表現し難い身体経験を探求する、看護学、健康心理学、臨床心理学などの諸分野における専門家に提示し、こうした研究がそれらの分野にどのように寄与できるかについても明らかにしていく。

３．研究の方法

この研究では、文献理解による理論構築と方法論の実践の循環を課題として、研究プロセスの各段階において、研究法の理論的枠組みを実践家に提示し、フィードバックをもらい、それを理論に反映させることを心がけた。

研究の第一段階では、文献に基づきジェンドリン哲学の基本的枠組みを整理するとともに、ジェンドリンの作成した「体験過程スケール」を参考にフォーカシングを応用した質的インタビューの具体的方法を整理した。

第二段階として、この「一人称の科学」の枠組みとインタビュー法を、心身医学の研究者やボディワークの実践家、身体技法の実践家などに提示し、そうした分野でこの枠組みがどのような意味を持ちうるかを探った。

これらを踏まえ第三段階では、看護学、健康心理学、臨床心理学、哲学などの諸分野における研究、臨床活動において、この「一人称の科学」というアプローチがどのような役割を果たすことができるかを、それぞれの領域の専門家との対話を通して明らかにした。

４．研究成果

この研究の第一段階として、ジェンドリンのプロセスモデルとジョンソン・レイコフの認知意味論に基づき、身体経験を意味のある形で言語化し理論と実践を結びつけるための理論を整備した。具体的には、ジェンドリン哲学の理解を目的に臨床心理学の池見陽と哲学の三村尚彦が主催する研究会に参加し、ジェンドリン哲学の基本的枠組みを整理した。また体験過程スケールの専門家である三宅麻希の協力を得て、「体験過程スケールを応用した質的研究法の試み」研究会を開催し、フォーカシングを応用した質的インタビューの具体的方法を整理した。

その成果は第19回人体科学会において「意味の基盤としての身体性について：ユージン・ジェンドリンのプロセスモデルと認知意味論からの提言」として口頭発表を行い、参加した研究者たちから多くの好意的フィードバックを頂いた。また、第3回21世紀統合医療フォーラム一心身医学と一人称のからだの出会い」（会場：関西大学）において心身医学者山岡昌之氏、心理臨床家藤見幸雄氏、日本心療内科学会会長中井吉英氏によるシンポジウム「一人称のからだと関係性：摂食障害の治療の現場から」を開催し、臨床現場の専門家にとって「一人称」がもつ意味について議論した。これにより、本研究が質的研究法としてだけでなく、広く心理臨床、看護、医療の現場においても重要な意義をもつ可能性が明らかになった。

こうした理論基盤と臨床家との対話をさらに進めるため、研究2年目の2010年7月31日に大阪大学西村ユミ氏と関西大学池見陽氏を迎え「『交流する身体』から生み出されることばーからだの感じを手がかりにした実践」をテーマにした公開講演会を行った。その成果は、Mind-Body Science 誌 2011No.21 に「人体科学会第21回公開講演会報告」として報告した。

また、2010年12月4日5日に一人称の体験を探求する身体技法であるソマティクスの代表的な実践家と心身医学に携わる医療者を招いて、主観的な体験と医療分野の客観的な身体へのアプローチの違いがもたらす問題について検討するシンポジウム（会場：関西医科大学）を開催した。特に、ジェンドリンの哲学に基づいて池見氏が提示した暗在と明在の相互作用という視点は、一人称のアプローチにおける体験と言葉の関係について考えるうえで、大きなヒントになった。

こうした実践家との対話の国際的対話として、2010年10月19日に、ボストン大学名誉教授のリヴィア・コーン博士を迎え「坐忘と座禅」をテーマに講演を行い、東洋の伝統的瞑想法である坐忘と座禅の比較を通して、一人称体験の探求法についての示唆をもらった。その成果は、11月27日の第11回トランスパーソナル心理学／精神医学会学術大会（会場：常葉短期大学）にて発表した

研究の過程で、この「一人称の科学」という視点は、これまでの認知科学やトランスパーソナル心理学における意識研究が先駆となっていることが明らかになった。それについて、日本宗教学会第70回学術大会におけるパネル「瞑想的世界認識と宗教研究」（企画代表者葛西賢太）にて、意識研究における一人称的アプローチの先駆者の一人であるフランシスコ・ヴァレラについて発表した。このパネルでの議論を通じて、欧米の意識研究から生まれた一人称の科学の方法が、20世紀後半以降の宗教研究のあり方とも密接につながっていることが確認された。

またこの「一人称の科学」というアプローチによって個人の経験を医療や健康福祉の分野で位置づける意味について、日本健康心理学会第24回大会（会場：早稲田大学）において、「スピリチュアリティの個別性とヘルスケアシステム」をテーマに発表した。これまで研究してきた身体経験を意味のある形で言語化し理論と実践を結びつけるという一人称の科学の課題は、健康心理学研究においては、特にスピリチュアリティを扱ううえでも重要であることを指摘した。

研究全体の総括として、2012年1月にこの3年間の研究で明らかになった、「一人称の科学」の基盤である体験理解の根本的枠組みの問題を探るため、看護の現象学の第一人者である西村ユミ（大阪大学コミュニケーションデザインセンター准教授）ジェンドリン研究の第一人者である池見陽（関西大学教授）、フッサール研究者でジェンドリン哲学に造詣の深い三村尚彦（関西大学教授）の3人の研究者を招きシンポジウムを行った。西村による基調講演「研究者がフィールドに身をおくことが、インタビューや分析・解釈に不可欠であるのはなぜか？」に続き、池見によるフォーカシングの実践、三村による「ディルタイとジェンドリンにとって『追体験』とは，何

をどのように体験することなのか」の報告をきっかけに議論を進め、精神科学における体験理解の諸問題について議論を深めた。

ここで得た議論の成果は、「看護研究」第45巻4号に「経験を記述するための言語と論理―身体論からみた質的研究」（印刷中）として報告した。これらの研究活動により宗教学、健康心理学、看護学、臨床心理学、哲学などの領域で「一人称の科学」という枠組みのもつ意義とその具体的な方法論についての提案を行うことができた。今後は、この研究によって明らかになった一人称の科学の基本的枠組みと、具体的なインタビュー法を関連諸分野における実践的な諸問題に応用するために、学際的な協力体制を構築し、より体験に基づく研究法の開発に努めていきたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
①村川治彦、経験を記述するための言語と論理―身体論からみた質的研究、看護研究、査読無、45巻4号〈増刊号〉、2012年　324-336

〔学会発表〕（計４件）
①村川治彦、スピリチュアリティの個別性とヘルスケアシステム、日本健康心理学会第24回大会、2011年9月12日、早稲田大学〈東京都〉

②村川治彦、Ｆ.バレーラが開いた瞑想と認知科学の出会い、日本宗教学会第 70 回学術大会、2011年9月4日、関西学院大学〈兵庫県〉

③村川治彦、東洋の身体技法における心身関係の一例；気功体験の現象学的記述から、日本トランスパーソナル心理学／精神医学会第11回学術大会、2010年11月27日、常葉学園短期大学〈静岡県〉

④村川治彦、意味の基盤としての身体性について：ユージン・ジェンドリンのプロセスモデルと認知意味論からの提言、2009年12月13日、第19回人体科学会、筑波大学〈茨城県〉
〔図書〕（計１件）
①村川治彦、Ｆ・ヴァレラによる仏教と科学の対話、（井上ウィマラ、葛西賢太、加藤博己編）仏教心理学キーワード事典、春秋社、2012年、168-169

６．研究組織

(1)研究代表者
村川　治彦（Murakawa Haruhiko）
関西大学・人間健康学部・准教授
研究者番号：20527105